

京都大学	博士(文学)	氏名	金 京 愛
論文題目	現代韓国語の時間関係形式 — <-ko iss->と<-e iss->の機能を中心に —		
(論文内容の要旨) 現代標準韓国語には、意味的・形態的におおよそ日本語の「-ている」に対応する<-ko iss->と<-e iss->という二つのアスペクト形式がある。通常、日本語の「-ている」は、意味的に適合する動詞であればどの動詞にも後接することができるのに対して、韓国語の場合、<-ko iss->は他動詞、およびket-ta「歩く」、nol-ta「遊ぶ」などの動作自動詞に後接し、出来事の「進行・結果状態」の意味を表し、一方、<-e iss->はkkayci-ta「割れる」、tteleci-ta「落ちる」などの状態変化自動詞にのみ後接し、出来事終了後の「結果状態」の意味を表すというのが基本的な分布である(cf. 高 2004、Yang 2004 など)。 本論文では、<-ko iss->と<-e iss->がそれぞれ以下のような機能をもつと主張している。 まず<-ko iss->については、純粋なアスペクト補助動詞としての機能(第3章)および<-ko iss->に含まれる存在動詞<iss->を主動詞とする存在構文を形成する(第4章)としている。それに対して、<-e iss->は、純粋なアスペクト補助動詞としての機能はもたず、<-e iss->に含まれる存在動詞<iss->を主動詞とする存在構文を形成する(第4章、第5章)とする。さらに、<-e iss->は複数の出来事間の時間的順序を表す機能(第6章)やパーフェクトを表す機能(第6章)ももつとするが、パーフェクトの機能をもつ<-e iss->は、出来事間の時間関係を表す機能の中でのみ実現されると主張している。 本論文は7章で構成されており、中心的な主張となるのは、第3章から第6章までである。ここではまず全体の構成を概述する。 はじめに第1章では、本論文の目的と方法、そして主に韓国語における時間関係形式<-ko iss->と<-e iss->、および関連する形式である<-ess->についての先行研究をふりかえり、本論文での立場を述べている。続く第2章では影山(1998)やIgarashi and Gunji (1998)、Pustejovsky (1995)など、本論文で依拠する先行研究の枠組みについて述べ、第3章以下での議論の準備を行なっている。第3章では動詞がもつ時間的語彙概念との関係から<-ko iss->と<-e iss->の意味機能について用例を挙げてそれぞれの記述・分析を行い、その分析およびそれぞれの形式の後接可能性、そしてそれらを取り出す局面的意味を基に韓国語の動詞分類を行なっている。第4章では<-ko iss->と<-e iss->形式の意味機能について存在という観点から両形式の新たな機能について述べ、第5章ではさらに<-e iss->形式のもつ存在構文としての機能につ			

いて<-ess->形式との比較を通して考察している。第6章では<-e iss->がもつ別の機能、すなわち複数の出来事間の時間関係を表すタクシスの機能を指摘し、その機能と出現条件について考察を行なっている。そして最後の第7章で本論文のまとめを行なっている。

次の本稿の中心となる第3章から第6章までで述べられている主張について、順を追って以下に具体的に述べる。

まず、第3章では、<-ko iss->と<-e iss->の基本的な意味機能について明らかにするため、それらが後接する動詞について詳しく扱っている。ここではIgarashi and Gunji (1998)に倣い、動詞がproto-lexicon (原辞書)においてもつ時間的概念について、start time、fnish time、reset time(以下それぞれs, f, rと略す)という三つの時点を利用し、sとfの間が時間的な幅をもつ場合にその局面をs<f、またfとrの間が時間的な幅をもつ場合にその局面をsf<rと表記し、個々の動詞についてそれぞれの時間的語彙概念を明示した。

第3章では、具体的に以下のような問題を中心的に取り上げている。

1. 多くの先行研究において、<-ko iss->および<-e iss->の解釈は、それぞれ動詞がもつアスペクト的意味によって決定されるとしているが、<-ko iss->と<-e iss->の機能とは具体的に何か。そして、この二つの形式は、動詞がもつアスペクト的意味とはどのように関わっているのか。

2. <-ko iss->は、ip-ta「着る」、yel-ta「開ける」などの動詞に後接され「結果状態」を表すこともできるが、<-e iss->が後接され表す「結果状態」とはどのように異なるのだろうか。

3. tha-ta「乗る」、memchwu-ta「止まる」などの動詞には<-ko iss->と<-e iss->のいずれの形式が後接され「結果状態」を表すことができるが、このような動詞がもつ時間的語彙概念は他の動詞とどのように異なるのだろうか。

そしてこれらの問題に対して、具体例を挙げながら以下のような主張を行なっている。

1. <-ko iss->と<-e iss->の二つの形式は、動詞がもつ時間的語彙概念を制限し、その一部であるインターバルを取り出すという機能をもつ。

2. 状態変化動詞の場合、<-ko iss->が取り出す「結果状態」と、<-e iss->が取り出す「結果状態」の意味は異なる。具体的には、(mwun-ul)yel-ta「(ドアを)開ける」などの状態変化他動詞には、<-ko iss->を後接して、動詞がもつ「維持(f<r)」局面から一部を取り出すことができるのに対して、(mwun-i)yelli-ta「(ドアが)開く」などの状態変化自動詞には、<-e iss->を後接して、動詞がもつ「結果持続(f<r)」局面から一部を取り出すことができるということである。このように同じ「結果状態」を表す際に、一方には<-ko iss->が後接され、もう一方には<-e iss->が後接されるのは、動詞が語彙的にもつ「結果状態」局面であるf<rにおいて、結果状態の終了時

点である r の意味がそれぞれ異なるためである。すなわち、 $\langle -ko\ iss-\rangle$ が後接される動詞がもつ $r=r_1$ は、主体によって再び元の状態に戻る（原状復帰）時点であり、 $\langle -e\ iss-\rangle$ が後接される動詞がもつ $r=r_0$ は述定対象が変化後の状態のまま存在していることを表す限界時点である。

3. $tha-ta$ 「乗る」、 $memchwu-ta$ 「止まる」などの動詞の「結果状態」を表すのに $\langle -ko\ iss-\rangle$ と $\langle -e\ iss-\rangle$ のいずれの形式を後接することができるのは、 $(mwun-ul)yel-ta$ 「(ドアを) 開ける」や $(mwun-i)yelli-ta$ 「(ドアを) 開く」などの動詞とは異なり、これらの動詞では、原辞書において r 時点が上述の r_1 であるか r_0 であるかが未指定であるためである。すなわち、原辞書においてすべての動詞は時間に関する s, f, r という時点をもち、 s と f の間、 f と r の間が時間的に幅をもつかどうか（局面をもつかどうか）については動詞ごとに語彙的に決まっている。ただ、それぞれの局面の意味を決める r 時点に関しては、主体によって原状の状態への復帰がなされる r_1 か、あるいは述定対象が変化後の状態のまま存在していることを表す限界時点である r_0 かが語彙的にすでに決まっている動詞（例えば、 $(mwun-ul)yel-ta$ 「(ドアを) 開ける」、 $(mwun-i)yelli-ta$ 「(ドアを) 開く」など）と決まっていない動詞（ $tha-ta$ 「乗る」など）がある。そのため、 r 時点が r_1 であるか r_0 であるかについて未指定である $tha-ta$ 「乗る」などの動詞には、 $\langle -ko\ iss-\rangle$ と $\langle -e\ iss-\rangle$ のいずれの形式も後接可能である。

さらに、事象が成立するのに s から f までの間が比較的短いため、通常は進行到達読みができないが、文脈を設定することにより $s < f$ の局面から一部を取り出すことができる場合があり、このような動詞がもつ意味を $s \approx f$ と表記し、別の一類をたてた。また、語彙的には $s = f$ という時間的概念をもつが、 $\langle -ko\ iss-\rangle$ が後接され進行読みができる場合があり、これらの動詞は $\langle -ko\ iss-\rangle$ が後接され新たに s の直前の局面を進行読みとした解釈ができるため、 $s' < s$ となる新しく派生された「 s' 」という時点を用いて別の一類をたてた。

そして以上の分析に基づき現代韓国語の動詞を 12 類に分類し、第 3 章のまとめとしている。以下がその分類である。

1. [+過程] [+維持]の動詞 ($s < f < r_1$)

例) $(mwun-ul)yel-ta$ 「(ドアを) 開ける」、 $(os-ul)ip-ta$ 「(服を) 着る」などの状態変化他動詞

2. [+過程] [+維持]の動詞 ($s \approx f < r_1$) : スローモーション的進行到達読みができる動詞

例) $(kapang-ul)tul-ta$ 「(カバンを) 持つ」、 $(hayntul-ul)cap-ta$ 「(ハンドルを) 握る」など

3. [-過程] [+維持]の動詞 ($s = f < r_1$) : 進行読みがない到達の動詞

例) $(sayngkak-ul)kaci-ta$ 「(考えを) もつ」、 $iptamwul-ta$ 「黙る」など

4. [+過程] [+結果持続]の動詞 ($s < f < r_0$)

例) (onto-ka)olu-ta 「(温度が) 上がる」、phyelchyeci-ta 「広がる」などの状態変化自動詞

5. [+過程] [+結果持続]の動詞($s \approx f < r0$): スローモーション的進行到達読みができる動詞 例) anc-ta 「座る」など
6. [-過程] [+結果持続]の動詞($s = f < r0$): 進行読みがない到達の動詞 例) (sakwa-ka) talli-ta 「(リンゴが) ぶら下がる」など
7. [+過程] [+結果状態]の動詞($s \approx f < r$): スローモーション的進行到達読みができる動詞 例) (cenchel-ey)tha-ta 「(電車で) 乗る」など
8. [-過程] [+結果状態]の動詞($s = f < r$): 進行読みがない動詞 例) memwulu-ta 「泊まる」など
9. [+過程] [-結果状態]の動詞($s < f = r$) 例) nol-ta 「遊ぶ」、(cip-ul) cis-ta 「(家を) 建てる」など
10. [+過程] [+結果状態]の動詞($s \approx f = r$): スローモーション的進行到達読みができる動詞 例) palkyenha-ta 「発見する」など
11. [+過程] [+結果状態]の動詞($s' \approx f = r$): 派生的進行到達読みができる動詞 例) tochakha-ta 「到着する」など
12. [-過程] [-結果状態]の動詞($s = f = r$): 進行読みがない動詞 例) kyelhonha-ta 「結婚する」、talm-ta 「似る」など

第4章では、<-ko iss-> と <-e iss-> 形式について、存在構文という新たな観点から考察を行っている。すなわち、<-ko iss-> は純粋なアスペクト補助形式としてのふるまいを示す(以下、「アスペクトタイプ」と記す)のみではなく、<iss-> (「いる／ある」)を主動詞とした存在構文としての文を形成する場合もある(以下、「存在タイプ」と記す)のに対して、<-e iss-> は純粋にアスペクトを表す補助形式としての解釈はもたず、<-e iss-> に含まれる存在動詞の <iss-> がもつ「存在」という意味を強くもつ存在構文を形成するとする。そして、それぞれの形式がもつ存在タイプの解釈について以下のように結論づけている。

- 存在タイプの <-ko iss-> は、存在動詞 <iss-> を主動詞とした「特定の場所に先行する動詞が表す出来事(過程・維持)を付帯状況として存在物が存在する」という特定存在様態にある存在物の所在を表す。

- 存在タイプの <-e iss-> は、「特定の場所に先行する動詞が表す状態変化後の結果状態で存在物が存在する」という存在様態の意味を表す。

ここで両形式が存在構文としての機能をもつと考える根拠として、まず <-e iss-> は状態変化後の対象が消えて存在しなくなるという意味をもつ salaci-ta 「消える」、epseci-ta 「なくなる」などの動詞には後接することができないことや、存在場所を表す -ey 「-に」格がないと欠落感があり、不自然な文となる場合があることを挙げてい

る。一方、<-ko iss->については、存在場所を表す -ey「-に」格と共起が可能であることや、通常の存在文の基本語順 (L(Locative)+S(Subject)+V(Verb)、cf. 久野 1973) と同じく語順が「場所+主語+動詞」である場合に比べて、語順が「主語+場所+動詞」であるときに容認度が著しく下がる場合があること、さらに、通常の存在動詞 <iss-> を主動詞とする存在文と文法的・意味的に共通点があることなどを挙げ、両形式が存在構文としての機能をもつことについて論じている。

第5章では、第4章に引き続き、<-e iss->形式を中心に、<-e iss->が存在構文としての特徴をもつことを明らかにするため、通常<-e iss->が後接できない二種の動詞類(「消滅動詞」類および kyelhonha-ta「結婚する」などの動詞類)を取り上げ、これらの動詞に<-e iss->が後接できない理由について以下のように述べている。

まず、「消滅動詞」類は、主語が指示する対象が存在しなくなるという意味を表すため、<iss->(=いる)が表す存在の意味を前提とする<-e iss->は後接されない。次に、kyelhonha-ta「結婚する」などの動詞類は、「非一時的な状態」への変化を表す状態変化自動詞であり、存在構文の「一時的な状態を表す」という意味と相容れないため、<-e iss->は後接されないとしている。

第6章では、第5章で<-e iss->が後接できないとした「消滅動詞」類および kyelhonha-ta「結婚する」などの二種の動詞類に<-e iss->が後接される場合があることを指摘し、これらの二種の動詞類に後接する<-e iss->は、常に従属複文(または独立した二つの文)の中でのみ実現され、「出来事に伴う設定時点を導入する」、および「存在構文の特徴をもたない」という特徴をもつことについて、実例を中心に述べている。これらの分布的特徴および意味的特徴から、これら二種の動詞類に後接する<-e iss->は、二つの出来事が「同時」であることを表すタクシスの機能をもつとしている。具体的には、これらの<-e iss->構文は、従属節(または先行文)が表す出来事により設定時点が導入され、<-e iss->を含む主節(または後行文)が表す状態が時間的に設定時点と「同時」であることを表していると主張している。この場合に二種の動詞類に後接する<-e iss->が表すいわゆる広義の「結果状態」の意味がタクシスの機能の中で時間的に「同時」であると解釈されるとし、このような「タクシスの機能をもつ<-e iss->」は、第4章や第5章において考察を行った存在構文としての性質をもつ<-e iss->とは異なる特徴をもつものの、<-e iss->がもつ二つの機能(「存在構文」を形成する機能と「タクシスの」機能)は連続しているものであること、すなわち、タクシスの機能をもつ<-e iss->が複数の出来事間の時間関係の中でも「同時的時間関係を表す」ということは、<-e iss->がもつ対象の「特定の状態(存在様態)」を表すという意味と連続するものであると述べている。

さらに、同じくタクシス機能をもつ<-e iss->が後接される kyelhonha-ta「結婚する」などの動詞類のうち、一部の動詞(chwulpalha-ta「出発する」、ttena-ta「発つ」、hapkyekha-ta「合格する」、sungliha-ta「勝利する」など)については、タクシス

的機能の中で従属節などが表す出来事と主節などが表す運動が実現した後の「効力」をもつ時点が同時的時間関係にあることを表すが、その場合は結果状態ではなく「パーフェクト」の意味を表すと述べている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は現在韓国ソウルで話されている朝鮮語標準語（以下韓国語と呼ぶ）の動詞のアスペクトについての研究である。韓国語では日本語の「～している」に対応するアスペクト形式として *-e iss-ta*、*-ko iss-ta* の二つが区別される。これまでの韓国語の研究では、*-e iss-ta* は状態変化を表す自動詞について結果の状態を表すのに対して、*-ko iss-ta* は状態変化を表さない自動詞、他動詞については進行を、またある種の他動詞については結果の状態を表すとされていた。しかし、実際には結果の状態を表す場合、これらの二つの形態では表せない場合がある。例えば、「死ぬ、結婚する」を意味する動詞を状態として表す場合、「死んでいる、結婚している」に対応する形式は使えない。つまりこの場合、*-e iss-ta*、*-ko iss-ta* のどちらの形式も使えず、日本語の「死んだ、結婚した」に対応する *-ess-ta* を使わなければ、死んでいる状態、結婚している状態を表すことはできない。また、*kitay-ta*(よりかかる)、*tha-ta*(乗る) などのある種の動詞は *-e iss-ta*、*-ko iss-ta* の両方を取ることができる。このように従来の研究では十分に説明できない現象が多く残されている現状で、論者は韓国語の動詞自体が本来的に持つ時間構造の精緻で網羅的な分析に基づいて動詞分類を行い、それによってこれらのアスペクト形式の意味論と使用制限を詳しく論じている。韓国及び日本を初めとする海外での先行研究を網羅的に検討して、その問題点を指摘し、対案を提出すると同時に、多くの新しい現象を掘り起こし、それに対する体系的な説明を加えている。それにより、本論文は韓国語における当該のアスペクト形式の意味論に関する研究として、最も包括的かつ、体系的なものとなっている。

本論文は、7章からなる。まず第1章で問題となる形式に関する先行研究と問題点を紹介し、2章では、よって立つ理論的枠組みとして使う3つの理論を導入している。すなわちテンス、アスペクトの動詞分類に関する論理意味論的なアプローチ、動詞の内部構造を明示的な述語で語彙分解的に表す語彙概念意味論、さらに、これら二つを同時に表示できる装置としての生成語彙論である。論者はこれら3つの理論を非常にうまく組み合わせることで独自の記述装置を構築している。

3章ではこの記述装置によって、*-ko iss-ta*、*-e iss-ta* というアスペクト形式が持つ意味構造を記述している。3章では、動作の結果生じる状態を停止し、現状に復帰する時点 *r*(リセットタイム)を二種類に分類し、*r*が語彙的に定義される動詞(*ip-ta*(着る) など)と *r*が定義されていない動詞(*tha-ta*(乗る))に分けることが提案されている。これにより、*ip-ta* が *-ko iss-ta* しかつかないのに対し、*tha-ta* には *-e iss-ta*、*-ko iss-ta* のいずれもつくことができることに説明が与えられる。つまり文脈により *r* が決まれば、主語が *r* を制御できるため *-ko iss-ta* がつき、そうでなければ、単なる状態とされて、*-e iss-ta* がつくわけである。論者はこのような記述を多数あげ、韓国語の動詞の精緻な分類を行っている。

4章－6章では、3章の分類だけでは説明できない現象として、結果状態を表すの

に -e iss-ta がつけられない場合をあげ、それに対する説明を与えている。例えば、epseci-ta(なくなる)、saraci-ta(消える)などの消滅を表す動詞には -e iss-ta をつけることはできず、過去を表す形式である、-ess-ta をつけなければ結果の状態を表すことはできない。これを説明するため、論者は、アスペクト形式 e iss-ta を構成する iss-ta は、存在の意味を残しており、この存在の意味に抵触するために、消滅動詞とは共起しないのだとする。すなわち日本語では「消えている」「なくなっている」の「いる」は完全にアスペクト形式となり、存在の意味が消えているのに対し、韓国語では存在の意味が残っているとす。さらに5章では、kyelhonha-ta(結婚する)、cwuk-ta(死ぬ)には、通常 -e iss-ta も -ko iss-ta もつくことができないという現象を扱う。論者はこれらの動詞は語彙的にrを持たず、かつ、文脈的にrを与えることもできないため、-e iss-ta をつけて状態を表すことはできないのだという明解な説明を与えている。

6章では、消滅動詞や、死ぬなどの非可逆的変化を表す動詞に -e iss-ta が例外的に共起する場合を考察している。論者によれば、これらは従属節が与える時点と -e iss-ta で示される状態が同時的であるときにのみ可能であり、位置を表す ey 格(二格)をとらないなど存在動詞としての振る舞いをしない。つまり文脈によりある参照時が与えられ、その時点である状態が成り立つような場合には、例外的に saraci-e iss-ta、kyelhonhay-e iss-ta が可能であるのである。論者によれば、この用法は -e iss-ta が本来的に持つ「対象の特定の状態(存在様態)を表す」という意味の特別な場合であるとされる。

7章はまとめである。

以上のように本論文は、韓国語のアスペクト形式 -e iss-ta、-ko iss-ta に関する精緻で網羅的な考察であり、この分野の研究を大きく進めた労作であると言える。しかし、いくつかの欠点もある。例えば、-ko iss-ta は他動詞にしかつかないという基本的な制約があるため、他の要因は無視すべきであるが、これを他の制約と混同している個所が散見する。また、yel-ko iss-ta(開けている)のように他の韓国語話者が容認できないとする文も僅かだがある。しかし、これらは本論文の価値を大きく減ずるものではなく容易に訂正・改善することが可能である。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2012年2月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。